

武藤嘉亭《下町の思い出》

—山川秀峰と上野・浅草の記憶

吉崎 真弓

はじめに

台東区立下町風俗資料館では、平成29(2017)年に特別展「下町の思い出—今年迎える周年記念展」が開催された。本展は、台東区制70年記念展として、台東区の節目の記憶を所蔵資料から振り返ることを掲げ、東京勸業博覧会開催から浅草オペラ誕生、地下鉄開業、台東区発足までという4つの中心的な出来事を軸に関連資料を展示したものであったが、同展のなかで、こうした節目を間近で経験してきた地元の画家、武藤嘉亭が制作した絵巻《下町の思い出》が展示された。武藤は昭和期に帝展・新文展・日展を中心に活動した日本画家で、モダンな要素を随所に取り入れた作品は、これまで近代日本美術をテーマとした展覧会に出品されることはあったものの^①、作家の経歴や画業には不明な点が多かった。本稿では、武藤嘉亭の人物像を明らかにするとともに、大正から昭和初期にかけて作家の幼い頃の脳裏に焼き付いた上野・浅草の生活風景をまとめた《下町の思い出》(全三巻・昭和61年、台東区所蔵)について、資料館で展示された場面を取り上げ、作風や構成の特徴からうかがえる影響関係を指摘する。

1. 《下町の思い出》と日本画家武藤嘉亭

1-1. 作品の概要

《下町の思い出》は、平成5(1993)年に作家本人から台東区に寄贈され、台東区立下町風俗資料館に所蔵されている。作家による目録には、以下のように記されている。

目録

一、絵巻物「下町の思い出」全三巻

第一巻 絵画三十九点

第二巻 絵画三十一點

第三巻 絵画三十三点 計百三点

桐箱付

内容 大正から昭和にかけての上野浅草の盛り場と下町の生活・風俗・情景を説明文付で描いたもの。棒絵具(顔彩)

《下町の思い出》は全三巻から成る絵巻物で、絵巻を収納する桐箱の蓋裏に書かれた直筆によると、昭和51(1976)年春から制作にとりかかり、10年後の昭和61(1986)年夏に完成した。一巻につきそれぞれ30点を超える場面が棒絵具で描かれた作品である。「寄付申込書」に記載された規格は、縦33(30)cm×長さ2100(2000)cmである^②。それぞれの場面については、平成5(1993)年6月に資料館で作成されたりリストを元に、再調査を行っ

た(別紙1～3)。

本作は、寄贈を受けた翌年(平成6年)に下町風俗資料館特別展「大正のくらしと風俗—絵巻物・下町の思い出」(会期:平成6年11月1日～平成7年2月12日)にて初めて展示された。当展は「大正時代を中心に、東京と庶民生活を所蔵資料で綴」とともに、寄贈された《下町の思い出》を紹介するというものであった。当時の展示リストがないため詳細は不明だが、パンフレットによると^③、白米引換券、「カルピス」や「森永ミルクキャラメル」といった飲食物のチラシ、袋、パッケージのほか、教科書、『立川文庫』『赤い鳥』、大正期の土野界隈を写した絵葉書、浅草を賑わせた活動写真館や劇場の発行物など、主に紙資料から、当時の庶民の生活や娯楽に関わる側面を《下町の思い出》の場面と照らし合わせながら浮き彫りにする試みであったと思われる。

1-2. 作家について

武藤嘉亭(むとうかてい、本名・佐太郎、別号・嘉門)は、明治43(1910)年東京市下谷区永住町(現在の東京都台東区元浅草)に生まれた^④。幼い頃から絵が好きで、上野動物園のライオンやトラ、タヌキなどを写生していたという。旧台東区立小島小学校卒業後、昭和2(1927)年16歳の時、山川秀峰に師事。昭和6(1931)年第12回帝展に三社祭の御飯屋を描いた《御かりや》で初入選^⑤。この時は本名である「武藤佐太郎」で出品している。祭りの風景が描かれており、賑やかな雰囲気が伝わる作品である^⑥。

武藤の代表作とされているのは、昭和12(1937)年第1回新文展に出品された《ショーウインドウ》(島根県立石見美術館蔵、図1)である。日本橋三越の美術部が舞台となったというこの作品は、和服の女性たちが「ショーウインドウ」の中の展示品を観覧している場面であるが、インコや熱帯魚などのモダンなモチーフの柄が描かれた女性たちの着物や帯、また彼女たちの佇まい自体、展示品のような整然とした美しさを称えた表現となっている^⑦。昭和初期の都市風俗を表した作品であるといえよう。

昭和19(1944)年に師であった山川秀峰が他界すると、伊東深水に学び朗峯画塾や青衿会に参加した。はじめ「武藤嘉門」名で帝展に出品していたが、昭和16(1941)年第4回新文展に「武藤嘉門(嘉亭)」という表記となり、それ以降は「武藤嘉門」でなく「武藤嘉亭」で出品している。「嘉亭」という雅号については、山川秀峰亡き後、「門」人から一つの場所に留まる、という意味で「亭」を伊東深水から授かり、以後「嘉亭」と名乗ったという^⑧。昭和43年(1968)まで帝展・新文展・日展に美人画や能舞台を主題とした作品を出品した。昭和51(1976)年春から《下町の思い出》の制作を始め、昭和61(1986)年夏

に完成、平成5(1993)年に台東区に寄贈したが、その2年後、平成7(1995)年に逝去した。

2. 《下町の思い出》各巻の内容

絵巻にはどのような場面が描かれていたのだろうか。浅草にかつて存在した凌雲閣や芝居小屋のほか、交番や市電、商店、料理屋、物売りなど当時の活気あふれる街の風景から、下駄や歯ブラシといった実際に使われていた生活道具に至るまで、多様な風物が軽快な筆致で記録されている。絵巻を三巻に分けた理由や、それぞれの場面の順番は不明であり、規則性も見られない。途中で作家の興味の赴くままに歌舞伎役者の話が出てくるなど、自由に制作した作品であることがうかがえる。

ここで作品名にも使われている「下町」という地域について確認しておきたい。「下町」は「山の手」に対する地名の通称として知られている。『江戸東京学事典』(三省堂、昭和62年)によると、「江戸の地勢は、おおよそ西北の大地と東西の低地とから」なっており、天正18(1590)年徳川家康の関東入国以降、「江戸の低地部に主として町屋が形成され、台地上(武蔵野台地の末端部分)に、おおくの武家屋敷が建設された。この低地部分が下町、台地部分が山の手といっぱんによばれた。」とされている⁹⁾。「下町」の語源はこうした地勢上の意味と、一方で、文政期に幕府が編纂した『御府内備考』によれば、「御城下町」(おしろまち)すなわち城下町という意味とがあり、定説はないという¹⁰⁾。「下町」の範囲は時代とともに変化し、大まかに整理すると、江戸時代には神田・日本橋・京橋付近を指し、幕末から明治20～30年代にかけて下谷・浅草・芝が加わる。大正期以後は深川・本所が入り、第二次世界大戦後は葛飾・江戸川付近まで広がった。本作で作家が主題の対象としている「下町」は、大正期以前にはすでに「下町」の範囲に入っていた下谷・浅草地域、すなわち目録にあるとおり、現在の「上野浅草」にあたる地域と認識してよいだろう。

以下、平成29年度の下町風俗資料館特別展で展示された作品の一部を、作家の解説文とともに紹介する。なお、解説文の改行は筆者が適宜調整し、原文の誤字脱字は原則として表記のままとした。

2-1. 汽車活動写真館(巻一、図2)

汽車活動写真館とは、浅草六区にあった遊園地ルナパークの跡地で大正5年(1916)年頃興行していた活動写真館である。ルナパークは、明治43(1910)年に浅草六区内に開場したものの、翌明治44(1911)年に汽車活動写真館の漏電によって焼失した¹¹⁾。しかし人気のあった当施設は大正5(1916)年頃には跡地で再開していたと思われる。本作は、作家が6歳の頃に再開した汽車活

動写真館を描いたものであろう。

浅草六区内ニ帝国館と富士館の間ニ
汽車活動なる小舎の覚なり
左図が館内と寄席 五十名で万員也
大人 二十セン 小人 半額

六区内の 全館に午後八時より半額割引で
ベルと共に列の客 一幕は十時まで
暫く見られ 帰りに来々軒の支那そば
すしや横丁も客呼びで賑やか
浅草の有りようはこのへんに今昔の思なり

この写真館は、汽車の走行音とともに走行中と同様に客席が振動し、前方のスクリーンに列車からの風景が映写されるという、あたかも汽車に乗っているような雰囲気味わえるものであった。景色ごとに弁士の説明があり、観光旅行を模した仕組みが人々の人気を博した。再開後の活動写真館で公開されていた映画について詳細は不明だが、少なくともルナパーク時代に上映されていたのは東海道線沿線、参宮線沿線、アルプス鉱山鉄道沿線、南満州鉄道沿線の映画など、さらに御殿場線の風景では鉄橋を渡ってトンネルに入る場面を繰り返しやっていたという¹²⁾。

「大人二十セン 小人半額」「午後八時より半額割引」で「一幕は十時まで」と詳述してある¹³⁾。入口中央には切符切りと思われる駅員の格好をした受付があり、汽車をリアルに再現したものであった。左図の写真館内の手前には、飲み物売りも仕事の傍ら活動写真に見入っている様子が描かれている。

2-2. 不忍池観月橋と弁天堂天龍門(巻二、図3)

観月橋は、明治40(1907)年東京勸業博覧会開催時に弁天堂から西側(池之端側)へ架けられた橋である。架橋により不忍池に人為的な手が加わり、池畔の利用や人の動きに変化が生じたとされている¹⁴⁾。昭和4(1929)年、築堤工事のため撤去された。この場面は大正3(1914)年に開催された東京大正博覧会開催当時の不忍池の様子である。博覧会の総入場者数は700万人以上を数え、会場では日本初のエスカレーターや、不忍池のケーブルカーが話題となった¹⁵⁾。「色電球の美しさ」が「当時として絶景」であったというイルミネーションも見所の一つであった。

大正博覧会開催当時 上野の賑わしさ、
図に観月橋 記
市電池之端寄りが 洋風の会場ずらりと並ぶ風景
夜景の色電球の美しさ 当時として絶景でした

特筆として、同博らん会に
昔の王様クレヨン發賣され、十二色、
金壺圓五十錢也、小学校で動物園遠足し
虎とペリカンを寫生して磊々とした事は
今日で思出なり

辨天堂殿のお茶屋笑福亭の
火灯し頃の 風情は格別也
なぜか 描きのなさなさが
今に 惜む

画面中央には東京大正博覧会開催に合わせて大正3
(1914)年に弁天堂前に建てられた天龍門が描かれている。
伊東忠太による設計で、弁天堂とともに昭和20(1945)
年3月の東京大空襲で焼失した。観月橋も天龍門も現在
では失われてしまったが、不忍池畔では釣りを楽しむ人々
の様子が描かれ、大正期の平和でのどかな風景が伝わる
場面となっている。

2-3. 日の出湯（巻三、図4）

日の出湯は、現在も同じ場所（台東区元浅草2丁目）
で営業している。創業は江戸時代末期から明治時代初期
といわれ、昭和2(1927)年と平成12(2000)年の2回に
わたって建て替えられた⁽⁹⁾。絵巻に描かれている大正
10年頃の番台や風呂場の光景とは現在は様変わりしてい
るが、当時の銭湯内部の雰囲気が伝わってくる。

大正十年頃浅草南清島町十番地二銭湯有り
朝湯から午後十二時まで 大人十せん 小人五せん
三助二十五せん。女の髪洗ひ別三十せん
番台にて湯札タタクと三助さんが下おび文で出て来
流し呉れる

左図 風呂場。上湯は男女供用也
上り湯の仕切板から シャボン箱他
用具の受渡し風景も人情味は豊で下町ならではの
流桶は暮に新桶に変る

料金設定も明記されており、番台のほか、風呂場の設
備や内観は大正期の銭湯資料としても貴重である。「三
助さん」とは、銭湯で風呂を焚いたり、客の体を洗った
りする人のこと⁽¹⁰⁾。「上り湯（あがりゆ）」（「上湯」）と
は「陸湯（おかゆ）」ともいい⁽¹¹⁾、体を洗うための湯と
して、もしくは、湯から上がる最後に浴びて出るための
湯として、浴槽以外に流し場の一隅に小さい湯槽と水
槽が設置されてあった⁽¹²⁾。大正10年頃の日の出湯には、
こうした「陸湯」がある情景が見られたのであろう。

以上、取り上げた場面はいずれも作家の記憶を元に大

正期の風景を再現したものだが、当時の雰囲気だけでな
く、とりわけ銭湯の番台や風呂場の構造、道具類など対
象を緻密に観察した描写もあり、単なる思い出にとどま
らない関東大震災前の記録画としても貴重な風俗資料と
いえよう。

3. 作風と影響

前述したように武藤嘉亭はまず山川秀峰に師事し、師
亡き後は伊東深水に学び、自らの作風を確立していった。
《下町の思い出》には山川秀峰との思い出が具体的に記
されている場面がある。武藤は師から受け継いだ作風を
どのように自作に反映させたのか、作品中からうかがえ
る影響について検討する。

3-1. 山川秀峰との思い出

武藤嘉亭が初めて師事した山川秀峰は、明治31(1898)
年京都に生まれ、本名は嘉雄といい、はじめ池上秀畝
に花鳥画を学んだ⁽¹³⁾。大正2(1913)年、鎭木清方に入
門。大正8(1919)年第1回帝展に《振袖物語》で初入選、
昭和3(1928)年第9回帝展で《安部野》、第11回（昭和
5年）帝展では《大谷武子姫》で特選を受賞した。第10
回（昭和4年）、第12回（昭和6年）以降は無鑑査となり、
《序の舞》（昭和7年第13回帝展）や《信濃路の女》（昭
和15年紀元二千六百年奉祝展）などが代表作として挙げ
られる。同じ清方門下の伊東深水とともに青衿会を主宰
し、弟子である武藤嘉亭や志村立美も参加している。美
人画の発展に尽くしたが、昭和19(1944)年、46歳とい
う若さで他界した。本節では、武藤嘉亭《下町の思い出》
に描かれた山川秀峰に関する思い出を紹介する。

3-1-1. 山川秀峰邸（巻二、図5）

まず、武藤が《下町の思い出》の中で、山川秀峰の自
宅を描いた場面および師と作品について記述した部分を
取り上げる。

昭和二年春、恩師山川秀峯画伯、アトリエと寓
下谷上野桜木町四九番地、寛永寺門前
私此所に門下生としての第一歩なり

御両親と奥様あや子夫人新婚時代にて
先生廿八才、私十六才、志村立美君、
玄関子に十九才
恩師は京都の産れ 初子にして御一家一統にて
上京され 日本橋浜町へ東京住居が續く
上野桜木町十六番地より同二十一番へその後
同寛永寺門前桜木町四九番地ニ落付く
受賞作並ニ私の覚へ有る出品作を記

「初島の由来」「都古路文後の丞」「振袖火事と娘」
十六番地、一 廿一番地
四十九番地にて特選受賞二度
「阿倍野」「九条武子姫」「盲女朝顔図」
「序の舞ノ図」昭和七、八年浜町二丁目移住、
後ノ作「陰に集ふ」「アコーデオン」「彼岸ノ図」
(中略)
郷土會展、青衿會展、個人展、と他多く有り
人物画新進流行作家として斯界の囑望でありしが
戦時中 昭和十九年十二月廿八日夭逝されし事
惜しき思ひ也

山川秀峰が京都から寛永寺門前のアトリエに落ち着くまでの経緯と、作品を制作した際の住所まで詳細に記述している。師匠の残した作品を、解説ではないものの丁寧羅列しており、若くして他界した師を偲び尊敬の念を抱いている様子がうかがえる。なお、文中に出てくる志村立美は、武藤より3歳上で明治40(1907)年群馬県高崎市に生まれ、神奈川高等工業学校図案科を中退後、大正13(1924)年山川秀峰に入門、翌年から師の勧めで新聞や雑誌の挿絵を描き始めた。代表作に林不忘「丹下左膳」(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』昭和8年掲載)がある。郷土会や青衿会のほか、日本画会、日月社展などに出品、昭和49(1974)年には出版美術家連盟会長となったが昭和55(1980)年に逝去した⁽²¹⁾。武藤の兄弟子であり、さらに志村の妹が武藤の妻となったため義理の兄弟となったことから、武藤嘉亭とは親戚としても交流があったという⁽²²⁾。

3-1-2. 食事の思い出 (巻二、図6・7)

武藤は山川としばしば食事を共にし、芸術面だけでなく美食の思い出としても印象深かったようだ。第二巻には「画学生として山川秀峯の弟子になってから夕食にさそわれ連れ出された」という「とんかつ スキヤ」(昭和2年頃・巻二、図6)、「仏蘭西料理 ヤマト」(昭和6年頃・巻二、図7)といった料理屋の外観とともに食事のメニューも記されている。「とんかつ スキヤ」は昭和2(1927)年頃、上野広小路付近にあった。昭和6(1931)年頃「仏蘭西料理 ヤマト」は本店が「牛込神楽坂上」に、「上野仲町通り」に支店があり、支店の方に出向いたのかもしれない。時事新報の記者であった白木正光は『大東京うまいもの食べある記』の中で、「スキヤ」について「蓮玉庵の少し先から中通りへ出たところにある気取った白亜館、ランチ(一圓)、コーヒーや紅茶(十五銭)で味は吟味されてゐます。」とし、「ヤマト」については「店は小さいがビフテキの美味しいのを安値で食べさせるのではなかなか有名である。(中略)いつも狭い店が馴染客で満員です。」と紹介している⁽²³⁾。「ヤ

マト」での食事風景は次のようであった。

師匠がヤマトのマスターとおなじみの為
時折り 夕食にお誘い下され御ち走になったりし
メニュー見ても不明 運れる品は毎度同じ品で
必ず目方の有るビーフステーキのレヤ、スープ、
ゼンサイ、バターピーナツ、食い終る頃
大きな伊セ海老のコキール合せ
フランスパン皿一ぱい コーヒー・萬腹して
暫く休み 先生は六区へ活動寫眞へお出、
卒当に美味で 青年時なればこそその健啖家
高價な事も知った
先生は美食家で大森海岸ニ沢田屋、つるや等へ
かに料理を食べくらべに連れられ
遂ニ私ノ負けとなる
種々とユモアーな食物で思出は山と有ります
フランス料理幕はメる

この記述によると、山川は美食家で、上野近辺だけではなく大森海岸の方まで足を伸ばしている。「仏蘭西料理 ヤマト」での場面はメニューが細かく思い出されており、強烈な印象として残ったようである。師とともに食や娯楽を楽しみながら制作活動に励んでいたことがうかがえる。

3-2. 山川秀峰の影響と鍋木清方の「卓上芸術」

武藤嘉亭の《下町の思い出》は、上野や浅草の風景や風物を記録した場面が中心であるが、本来武藤が得意とした美人画や少女を描いた場面も見逃せない。ここでは特に山川秀峰の描く女性像と共通点が挙げられる場面として、少女像を描いた部分を取り上げたい。

「大正の中期一世を風靡したカチュシヤの流行歌のセルロイド制(ママ)の輪櫛」(巻三、図8)とあるように、両脇に花飾りのついたカチューシャは少女たちの間で人気を博した。ふっくらとした頬が特徴の少女は、山川秀峰が描く女性たちにもしばしば見られる。とくに、講談社野間記念館蔵《母の愛》(昭和2年・図9)は、娘の晴れ姿を誇らしげに見守る母親の視線が注がれる、可愛い梅柄の着物に包まれた少女の伏し目がちな表情が印象的である。この作品は《下町の思い出》にて武藤が描いたカチューシャを身につけた少女像にも類似している。山川の代表作《序の舞》も、丸みを帯びた顔の輪郭がやはり連想されるだろう。また、山川がモダンな柄を和服のモチーフに取り入れた女性を題材に好んだように、弟子であった武藤も少女の髪飾りや女性の髪型の流行には常にアンテナを張っていたと思われる。

さらに、武藤が《下町の思い出》を絵巻という形態にしたことには、おそらく山川秀峰の師にあたる鍋木清方

が提唱した「卓上芸術」が念頭にあったように思われる。「卓上芸術」は、鐫木によれば、「畫卷、畫帖又は挿繪などの、壁面に掲げるものではなく、卓上に伸べて見る藝術の一形式を指して云つたもの」であるという⁽²⁴⁾。鐫木の「卓上芸術」にあたる作品には、『注文帳』（昭和2年）『にぎりえ』（昭和9年）『朝顔日記』（昭和14年）『朝夕安居』（昭和23年）などがある。その中でもとりわけ『下町の思い出』の絵巻という形式にも共通するのが『朝夕安居』（図10）である。明治期下町の夏の1日を描いたもので、鐫木が提唱した「卓上芸術」の代表的な作品であり、第4回日展（昭和23年）に出品された。『下町の思い出』には、検討してきたように山川秀峰との思い出が詳しく記録されており、明らかに画風の影響がうかがえる場面もあるが、一方で、全体の構成としては鐫木清方の「卓上芸術」を参考にした作品であるともいえるだろう。

おわりに

本稿では、武藤嘉亭作『下町の思い出』について、下町風俗資料館での展示の際に取り上げた場面の一部と山川秀峰との思い出、および山川との影響関係を中心に指摘した。とくに人物では、山川秀峰の描く女性像に類似性が見られ、セルロイド製カチューシャを描いた場面に登場した少女は、丸みを帯びた柔かな輪郭線が特徴で、いかにも山川の描く少女像が想起できることを指摘した。また、作品全体の構成に関する点においては、鐫木清方が唱えた「卓上芸術」の代表作『朝夕安居』に共通項を見出すことができる。このように『下町の思い出』は、直接の師であった山川秀峰のみならず、さらに山川の師にあたる鐫木清方にもその端緒をたどることができよう。本稿では山川秀峰亡き後に師事した伊東深水による影響まで考察することが叶わなかったが、今後は、伊東深水との関わり、とくに朗峯画塾や青衿会の出品作を発掘して検証することも必要であろう。

『下町の思い出』は、作家の記憶を元にした「もの」や風景といった記録的要素が強く、思い出すままの回想録と随筆を混成させた漫筆風の作品であるが、大正から昭和初期の風景や印象に残った生活資料を冷静に観察し、絵巻という形にまとめあげ、自身の記憶を後世に残したいという作家の強い使命感ともいべき思いが場面ごとに伝わる作品である。本作は、大正から昭和戦前期を中心とした上野・浅草地域の世相を反映した風俗が広範に、かつそれぞれの事物が詳細に蘇る資料として、多岐にわたり示唆に富む貴重な作品であるといえよう。

註

- (1) 例えば、『目黒雅叙園コレクション 美人と花鳥 昭和初期の日本画名品展』そごう美術館、1988年、『大正シック展—ホノルル美術館所蔵品より—』2007年、東京都庭園美術館他、2007年、『1930年代・東京』展、東京都庭園美術館、2008-2009年、『ようこそ美人画館へ』島根県立石見美術館、2015-2016年、など。
- (2) 括弧内は麻紙の規格。
- (3) 財団法人台東区芸術・歴史協会 台東区立下町風俗資料館『《特別展》第18回平成6年度 大正のくらしと風俗—絵巻物・下町の思い出—』パンフレット、1994年、2-8頁。
- (4) 作家の経歴は、武藤嘉亭ご子息武藤勝彦氏からの聞き取りのほか、以下を参照。作家本人による『画歴略』（大悲庵 武藤嘉亭）、菊屋吉生監修『作家略歴』国際アート編図録『大正シック展—ホノルル美術館所蔵品より—』2007年、東京都庭園美術館他、頁付なし。
- (5) 下町風俗資料館には『御飯屋』のA3複製4点が所蔵されており、記録には「三社宵宮御飯屋を描く。原画屏風二曲。ウテナ化粧品所蔵」（記録日2000年8月）とあるが、現在の所蔵先は不明である。
- (6) 本作は、日展『日展史10帝展編五』（1983年、158頁）に図版が掲載されている。
- (7) 『Kimono Beauty—シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—』千葉市美術館他、東京美術、2013年、265頁。
- (8) 武藤勝彦氏のご教示による。
- (9) 木村礎『下町』『江戸東京学事典』三省堂、1987年、97頁。
- (10) 前掲、97頁。
- (11) 田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ 活動写真時代』中央公論、1975年、171-172頁。ルナパークおよび汽車活動写真館については、上田学『明治40年代の都市と〈子供〉の映画観客—汽車活動写真館を手がかりに』『映像学78』2007年、5-22頁、にも詳しい。なお、大阪にもルナパークなる遊園地があった。吉見俊哉『博覧会の政治学』（中央公論、1992年、147-149頁）を参照。
- (12) 米山蟻兄『浅草公園観せ物総捲り』『新演芸』3号、1916年、119頁、台東区文化財専門委員会監修、台東区文化財調査報告書第五集『浅草六区—興行と街の移り変り』台東区、1987年、35頁。
- (13) 本人の記憶を元にした記述のため若干の相違もあると思われる。例えば米山蟻兄、同上、119頁や、阿久根巖『浅草の見世物 元祖玉乗曲藝大一座』（ありな書房、1994年、173頁）によると、まずルナパークに入場するために5銭、汽車活動写真館の入場料はさらに3銭であったという。
- (14) 『台東区史・通史編Ⅲ』台東区役所、1966年、59頁。
- (15) 『台東区立下町風俗資料館図録』公益財団法人台東区芸術文化財団台東区立下町風俗資料館、2017年（6版）、23頁。
- (16) 田村祐一氏（有限会社日の出湯取締役）によると、氏の曾祖母が1939年に買い取って現在に至っているという。

- (17) 新村出編『広辞苑第七版』岩波書店、2018年、1221頁。
「三助」の銭湯内における役割および職階については、中野栄三『入浴・銭湯の歴史』雄山閣、1994年、175－178頁を参照。
- (18) 新村出編、前掲、396頁。
- (19) 中野栄三、前掲、162－163頁。ここでは「陸湯」でなく「岡湯」と表記している。
- (20) 山川秀峰の経歴は、河北倫明監修『近代日本美術事典』講談社、1989年、363頁、『鐔木清方の系譜―師水野年方から清方の弟子たちへ―』倉田公裕監修、鎌倉市鐔木清方記念美術館編集・発行、2008年、202頁、を参照した。
- (21) 志村立美の経歴は以下を参照。篠原聰「郷土会をめぐる人々」『鐔木清方の系譜―師水野年方から清方の弟子たちへ―』前掲、204頁、『大正ロマン・昭和モダン 大衆芸術の時代展～竹久夢二から中原淳一まで』茨城県天心記念五浦美術館、2009年、118頁。
- (22) 武藤勝彦氏のご教示による。
- (23) 白木正光編著「7 上野界限」『大東京うまいもの食べある記』丸ノ内出版社、1933年、205-206頁。
- (24) 鐔木清方『續こしかたの記』中央公論美術出版、1967年、164頁。

図版典拠

- 図1 『1930年代・東京』展図録、東京都庭園美術館、2008－2009年、31頁
- 図2～8 《下町の思い出》筆者撮影
- 図9 『美のながれ 講談社野間記念館名品図録』講談社野間記念館、2005年、157頁
- 図10 『鐔木清方記念美術館収蔵品図録―卓上芸術編（二）昭和期―』鎌倉市鐔木清方記念美術館、2002年、69頁

謝辞

作品調査にあたり、ご遺族の武藤勝彦氏、有限会社日の出湯取締役田村祐一氏にご協力を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

（よしざき まゆみ）

図1 武藤嘉門《ショーウインドウ》1937年 240×360cm 島根県立石見美術館蔵

図2 汽車活動写真館（巻一）

図3 不忍池観月橋と弁天堂天龍門（巻二）

図4 日の出湯（巻三）

図5 山川秀峰邸（巻二）

図6 とんかつ スキヤ（巻二）

図7 仏蘭西料理 ヤマト（巻二）

図8 セルロイド製の輪櫛（巻三）

図9 山川秀峰《母の愛》1927年 45.8×35.7cm 講談社野間記念館蔵

図10 鏑木清方《朝夕安居》（部分）1948年 鎌倉市鏑木清方記念美術館蔵

別紙1 《下町の思い出》巻一

No.	主題	年代	寸法 (cm)
1	浅草寺本堂入口①志ん橋の提灯②二天門の提灯		30×91
2	浅草寺伝法院通りの講談落語寄席 金車亭の幟		30×41
3	公園劇場の幟		30×40
4	新国劇についての解説	大正12年夏	30×47
5	浅草六区内の江川館の玉乗り	大正期	30×73
6	花屋敷の見世物 山雀の曲芸	大正時代	30×51
7	①本所七ふしぎ②河童の仕掛の図解の図「横断面」		30×74
8	浅草六区と瓢箪池 中の茶店		30×43
9	観音堂横から奥山への通り路 九代市川団十郎「暫」銅像	戦前	30×50
10	浅草六区一二階の夜景		30×41
11	浅草六区①汽車活動外観②汽車活動内観		30×92
12	浅草六区各館についての解説① (4分割)		30×45・21・6・34
13	永住町の火事番	大正8、9年頃	30×29
14	纏 (まとい) 図 (東京都内第十区及び第五区)		30×80
15	第五区纏解説 (八番組を除く一番組から十番組まで)		30×79
16	組の町名内訳		30×46
17	鳶の組頭たち		30×53
18	三味線堀の風景と解説	大正初期	30×69
19	浅草三筋町 子爵水戸藩松平家屋敷 水道局辺り	大正12年まで	30×43
20	浅草小島町 子爵大久保邸下屋敷 浅草区小島町小島小学校通り		30×44
21	高下駄に黒ランシャントでの通学	大正初期から12年頃	30×35
22	各種下駄、草履		30×57
23	小学生の通学風俗	大正5、6年	30×39
24	母校小島小学校の卒業式	大正11年春	30×51
25	下谷神社表通り角のうしろ問屋について	大正12年まで	30×12
26	下谷神社表通り角のうしろ問屋	大正12年まで	30×46
27	松本栄作の釣竿師 東作釣竿	大正12年まで	30×47
28	生菓子店 廣木屋本舗と西照寺門前	大正11年頃	30×43
29	薬店通りの由来について解説		30×27
30	中張り風		30×74
31	大正期の歯ブラシ	大正期	30×42
32	大正期の遊び玩具とベーゴマ遊び	大正期	30×92
33	三国やの飴まんぢゅう		30×57
34	魚売り (蟹、鰯)		30×35
35	ラムネ売りとラムネ瓶		30×52
36	納豆売り		30×40
37	みつパン売り		30×36
38	定斎屋		30×31
39	金魚売り		30×25
40	落款		30×54

本リストは、平成5 (1993) 年に台東区立下町風俗資料館にて作成された「絵画内容一覧」を参考に、筆者が原本を再調査したうえで再作成したものである。
 主題は作品中に明記されている情報を優先し、不明もしくは分割が必要な場合は筆者が適宜作成した。
 年代は作品中の解説文に明記されているもののみとした。

別紙2 《下町の思い出》巻二

No.	主題	年代	寸法 (cm)
1	松屋本店	大正12年まで	30×48
2	高橋砂糖店		30×53
3	浅草永住町大地主、町会長石井芳二郎邸	大正末期	30×45
4	関東大震災の被害を受けた米小売店	大正12年	30×55
4	共同水道	大正時代	30×28
5	南稲荷町角の太鼓焼の元祖の出店	大正後期まで	30×42
6	永住町武藤家代々の生家		30×78
7	栄蔵寺表門 三河屋の張り場	大正末期	30×37
7	栄蔵寺略図 稲荷社と墓地入口	大正震災まで	30×53
8	栄蔵寺代々住職		30×48
8	武藤家二代目佐助翁による石仏観音座像		30×37
9	浅草坂東報恩寺の俎開き		30×37
10	①清島町翁だんご②西洋料理店気賀亭③東岳寺入口④清島町日東製氷の氷倉	大正12年	30×91
10	日東製氷氷倉についての記述		30×11
11	小料理屋のんき	大正10年頃	30×42
11	福安材木商	大震災前	30×51
12	大雨時の阿部川町と栄久町についての記述		30×7
13	東京大正博覧会当時の観月橋が架かる不忍池と弁天堂前の天龍門	大正3年	30×91
14	すきやき世界本店	大正12年以前	30×57
14	路地 揚出し 小糸源太郎生家		30×33
15	高級料亭 山下	大正10年頃	30×44
15	五十番 支那料理		30×45
16	上野桜木町山川秀峰アトリエ入口	昭和2年	30×51
17	山川秀峰の住居と山川作品について		30×36
18	谷中天王寺五重塔焼失	昭和37年（昭和32年？）	30×44
19	上野東照宮鳥居横お化け燈籠	大正8、9年頃	30×45
20	摺鉢山で遊ぶ子供たち	大正末期	30×48
21	御徒町大踏切を通る貨物列車と通行人	大正12年前	30×49
22	とんかつ「スキヤ」の思い出	昭和2年後半	30×45
22	「ボンチ軒」「蓬萊屋」について		30×15
23	仏蘭西料理「ヤマト」	昭和6年頃	30×50
24	ヤマトでの食事の思い出		30×16
25	隅田川沿いの賑いについて	大正7、8年頃	30×23
26	隅田川ボンボン蒸気	大正期	30×51
27	隅田川畔 亀清		30×51
28	鳥越神社通りろうそく処	大正9年頃	30×52
29	歌舞伎の思い出	昭和初期	30×44
30	役者名 千社札		30×91
31	新派劇団 役者名	昭和初期	30×53
31	俳優と作品名		30×43
32	落款		30×91

別紙3 《下町の思い出》巻三

No.	主題	年代	寸法 (cm)
1	ゆで玉子とアイスクリン売り	大正末期	30×45
2	甘納豆売りとミツパンヤの屋台		30×46
3	千町の一文菓子		30×43
4	新絵細工売り タダシンコヤ	大正期	30×44
5	魚屋 魚金	大正8、9年頃	30×57
6	浅草橋セルロイド卸問屋戸谷商店 セルロイド製の輪櫛	大正中期	30×49
7	牛乳配達車(文明軒)の色別商標、牛乳瓶		30×46
8	土富店長遠寺町内交番 巡査の制服 ネズミ入	大正6年頃	30×47
8	自働電話の内外	大正12年頃まで	30×44
9	総菜屋 角屋	大正8、9年頃	30×50
10	家庭内電灯コード最新の用具と電球	大正期	30×41
11	下町の朝の風景と浅草七軒町開盛座付近の様子、芝居小屋について		30×85
12	浅草開盛座	大正期	30×50
12	落語家三遊亭圓右		30×45
13	立花屋橋之助	大正8年春	30×53
14	大奇術の帰天斉正一		30×42
15	浅草七軒町の町芝居	大正7、8年	30×43
16	芝居小屋内部と役者たちについて		30×43
17	等覚寺の門前通りについて		30×17
17	等覚寺の築地堀	大正12年大震災まで	30×48
18	チンチン電車	大正7年頃	30×40
19	竈と天窓		30×43
20	浅草永住町54番地 五番組の鳶頭大竹?の「二代目堀田亀芳」玄関入口	大正7、8年頃	30×42
21	浅草永住町54番地 三河屋喜兵衛初代 善兵衛二代目 藍染大店 店内風景	大正12年前	30×45
22	浅草南清島町10番地 日の出湯番台と風呂場	大正10年頃	30×95
23	浅草南清島町10番地 雑貨屋	大正12年頃	30×45
24	長屋が連なる下町の街並み	作者小学校時代	30×66
25	浅草東本願寺入口と境内の見世物小屋について	大正7年頃	30×90
26	菊屋橋通り門跡のゆば処	大正8、9年	30×50
26	菊屋橋角の店舗について 山田屋薬舗ほか		30×4
27	タドン作り	大正10年頃	30×40
28	桐材火鉢作り	大正10年頃	30×43
29	開盛座通り 永住町密?院門前角 焼芋屋店先の販台と秤	大正末期まで	30×45
30	焼芋屋の焼釜	大正末期まで	30×50
31	永住町誓教寺門前女髪結い屋	大正7年頃	30×45
31	永住町誓教寺門前女髪結い屋について		30×23
32	かもじ屋 看板	大正12年頃	30×43
33	女性の髪型 素人・芸妓・花柳界の半玉・夜会巻	大正末期	30×59
33	女性の髪形 女房共々・若奥様風・娘	大正末期	30×48
34	落款		30×90